

貯 法：しゃ光・気密容器
使用期限：容器、外箱に表示

日本標準商品分類番号	
875200	
承認番号	(62AM)693
薬価収載	1987年10月
販売開始	1987年10月

127

漢方製剤

マ オウ ブ シ サイ シントウ

ツムラ麻黄附子細辛湯エキス顆粒(医療用)

【組成・性状】

組 成	本品7.5g中、下記の割合の混合生薬の乾燥エキス1.50gを含有する。 日局マオウ………4.0g 日局ブシ末………1.0g 日局サイシン………3.0g	
	添加物	日局軽質無水ケイ酸、日局ステアリン酸マグネシウム、日局乳糖水和物
性 状	剤 形	顆粒剤
	色	暗灰色
	におい	特異なにおい
	味	わずかな甘味と辛味
	識別コード	ツムラ/127

【効能又は効果】

悪寒、微熱、全身倦怠、低血圧で頭痛、めまいあり、四肢に疼痛冷感あるものの次の諸症：
感冒、気管支炎

【用法及び用量】

通常、成人1日7.5gを2～3回に分割し、食前又は食間に経口投与する。なお、年齢、体重、症状により適宜増減する。

【使用上の注意】

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

- (1)体力の充実している患者 [副作用があらわれやすくなり、その症状が増強されるおそれがある。]
 - (2)暑がり、のぼせが強く、赤ら顔の患者 [心悸亢進、のぼせ、舌のしびれ、悪心等があらわれることがある。]
 - (3)著しく胃腸の虚弱な患者 [口渇、食欲不振、胃部不快感、悪心、嘔吐等があらわれることがある。]
 - (4)食欲不振、悪心、嘔吐のある患者 [これらの症状が悪化するおそれがある。]
 - (5)発汗傾向の著しい患者 [発汗過多、全身脱力感等があらわれることがある。]
 - (6)狭心症、心筋梗塞等の循環器系の障害のある患者、又はその既往歴のある患者
 - (7)重症高血圧症の患者
 - (8)高度の腎障害のある患者
 - (9)排尿障害のある患者
 - (10)甲状腺機能亢進症の患者
- [(6)～(10)：これらの疾患及び症状が悪化するおそれがある。]

2. 重要な基本的注意

- (1)本剤の使用にあたっては、患者の証(体質・症状)を考慮して投与すること。なお、経過を十分に観察し、症状・所見の改善が認められない場合には、継続投与を避けること。
- (2)他の漢方製剤等を併用する場合は、含有生薬の重複に注意すること。ブシを含む製剤との併用には、特に注意すること。

3. 相互作用

併用注意(併用に注意すること)

薬 剤 名 等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
(1)マオウ含有製剤	不眠、発汗過多、頻脈、動悸、全身脱力感、精神興奮等があらわれやすくなるので、減量するなど慎重に投与すること。	交感神経刺激作用が増強されることが考えられる。
(2)エフェドリン類含有製剤		
(3)モノアミン酸化酵素(MAO)阻害剤		
(4)甲状腺製剤 チロキシン リオチロニン		
(5)カテコールアミン製剤 **アドレナリン イソプレナリン		
(6)キサンチン系製剤 テオフィリン ジプロフィリン		

4. 副作用

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していないため、発現頻度は不明である。

(1)重大な副作用

肝機能障害、黄疸：AST(GOT)、ALT(GPT)、Al-P、 γ -GTPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(2)その他の副作用

	頻度不明
過 敏 症 ^{注1)}	発疹、発赤等
自律神経系	不眠、発汗過多、頻脈、動悸、全身脱力感、精神興奮等
消 化 器	口渇、食欲不振、胃部不快感、悪心、嘔吐等
泌 尿 器	排尿障害等
そ の 他	のぼせ、舌のしびれ等

注1)このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。

5. 高齢者への投与

一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。

6. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には投与しないことが望ましい。[本剤に含まれるブシ末の副作用があらわれやすくなる。]

7. 小児等への投与

小児等には慎重に投与すること。[本剤にはブシ末が含まれている。]

【薬効薬理】

1. 抗炎症作用

- (1)マウスに経口前投与したところ、酢酸による毛細血管透過性、アラキドン酸あるいはホルボールエステルによる耳介浮腫並びにヒスタミンあるいはブラジキニンによる皮膚毛細血管透過性の亢進がそれぞれ阻害された¹⁾。
- (2)ラットに経口前投与したところ、カラゲニンによる足蹠浮腫が抑制された。また、コットンペレットを移植したラットに経口投与したところ、肉芽増殖が抑制された¹⁾。

2. 抗侵害受容作用

- (1)マウスに経口前投与したところ、酢酸ライジング法、テールフリック法、尾圧法及び反復低温ストレス(RCS)法において抗侵害受容作用が認められた²⁾。
- (2)カラゲニン炎症疼痛モデルラット及びアジュバント関節炎疼痛モデルラットに経口投与したところ、抗侵害受容作用が認められた²⁾。

3. 作用機序

本剤は、以下の作用により薬理効果を示すことが示唆されている。
抗侵害受容作用
反復低温ストレス誘発疼痛過敏モデルラットに経口投与したところ、侵害受容閾値の低下が抑制された。この抗侵害受容作用は、セロトニン神経毒5,7-DHT及びセロトニン受容体拮抗薬(メチセルギド、シプロヘプタジン、メチオテピン)の脊髄クモ膜下腔内注射前処置により減弱した。また、カテコラミン神経毒6-OHDA前処置では、抗侵害受容作用の最大効果が抑制されたが、5,7-DHTよりも効果が弱く、 α -アドレナリン受容体拮抗薬(フェントラミン)前処置では影響を受けなかった³⁾。

【包装】

500g、5kg(500g×10)、2.5g×42包、2.5g×189包

【主要文献】

- 1) Ikeda, Y. et al. Am. J. Chin. Med. 1998, 26(2), p.171.
- 2) 池田 孔己・他. 和漢医薬学雑誌. 1996, 13(1), p.81.
- 3) 佐藤 一哉・他. 痛みと漢方. 1998, 8, p.33.

***【文献請求先】**

株式会社ツムラ お客様相談窓口
東京都港区赤坂2-17-11 〒107-8521
TEL : 0120-329970 FAX : 03-5574-6610

